

Opening Symposium・オープニングシンポジウム

第三部

『ユビュ王』 人形劇想

フランスの作家アルフレッド・ジャリが創作したナンセンス劇『ユビュ王』の世界。パウル・クレーの人形に影響を受けた、不思議で怪しげでユニークな「布地・継ぎはぎ」の人形たちに生命が通います。

<出演>

武蔵野美術大学芸術文化学科 有志

×

人形制作 新見 隆



二期リゾート文化顧問をつとめる新見隆の指導のもと、武蔵野美術大学芸術文化学科で日々、芸術・文化を通した世界との触れ合い方について学ぶ学生有志の皆さんが、長い期間の準備を重ねて「山のシュレー」のために人形劇の上演を実現してくださいました。期間中は初日の「開き舞台」の夜に、また日中も観季館ホールでの四度に渡っての上演を多くのゲストの皆さまに楽しんでいただきました。

青き、森のユビュ

—十九世紀末から現代へ—

「Merde!!(くそつたれ)」と暴言を何度となく吐き捨て、根無し草のように、ふらふらと物語が展開される人形劇。それが『ユビュ王』です。1896年にアルフレッド・ジャリの手によって誕生したこの作品は、十九世紀までの従来の時代に決別し、後の二十世紀のベースとなる精神を牽引した、重要な作品です。

2010年の夏、東京の喧騒を離れて、緑あふれる落ち着いた避暑地那須を訪れ、この奇妙奇天烈・意味不明な劇を上演するということは、二十世紀から脈略と続く、私たちの日頃抱える日常や無意識に、改めて疑問を投げかける意味を、より多く孕んだのではないかと思います。

『ユビュ王』という物語は「Merde」という言葉を万物へ投げかけ、従来の価値観や常識へ「無意味」という意味を持ち込んだものでありました。十九世紀末に生まれたこの物語に流れる「Merde」精神は、その後、シュールレアリスムやダダなどの二十世紀を代表する芸術運動に大きな影響を与えるものです。意味の通じない、しっちゃかめっちゃかな物語のなかで、傍若無人ではあるが、憎むことのできない人間味あふれる登場人物が右往左往する姿は、とてもシュールで、また笑いを誘うものでもあります。

私たちの学びの師である新見隆教授が愛を込めて縫い上げた人形を手に、学生である私たち自身が動きまわり、歌い、叫び、演じた『ユビュ王』。「演じる」ということ自体、未経験者である私たちにとって、大勢の観客の皆さまの前での公演はとても緊張するものでした。

「山のシュレー」の期間中、幾度かの上演をさせていただき、おかけいただいた温かいお言葉や、感想の数々に感謝をいたします。私たちも上演の回数を重ねるごとに、より『ユビュ王』との距離を縮めていくことができました。

人形劇への参加メンバーの全員が有志という形で集い、劇中のセリフの言い回しから、動き、表情など、空き教室での練習を重ね、模索しながら、全員で作りに上げた人形劇です。人形劇としては前代未聞であったかと思いますが、皆さまに楽しんでいただけたのでしたら幸いです。このような機会を与えてくださったこと、ありがとうございます。

武蔵野美術大学芸術文化学科有志

(川寄雄司・内田麻美子・冠那菜穂・佐藤宏美・萩原五月・神谷悠季・森遥香・山澤千春)

